

# 高大連携による歴史授業の研究

寺前 駿（和歌山県立和歌山北高等学校）

三品 英憲（和歌山大学教育学部）

## I 研究の目的

本研究は、新学習指導要領に謳われ 2022 年度から授業が本格的に始まる「世界史探究」を念頭に、高等学校の世界史授業において史資料を積極的に用いる授業をどのように設計するか、また具体的にどのような史資料を用いることができるのかといった諸課題を初歩的に研究することを目的とするものである。

文部科学省『高等学校学習指導要領（平成 30 年 3 月告示）』では、主体的・対話的で深い学びの実現が学校教育における目標として掲げられ、その中では基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させることに並んで、これらの知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養う教育の充実に努めることを求めている。こうした大きな目標を踏まえ、地理歴史科としては「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成すること」を目標として掲げ、「世界史探究」においては「世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに、諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」ことを目指すとしている。本研究は、こうした学校教育の大きな転換を見据え、その準備の第一歩として史資料を活用した高校世界史の授業を模索しようとするものである。（文責：寺前・三品）

## II 研究の経過

本研究は、2020 年 4 月、和歌山県立和歌山北高校で地歴科（特に日本史と世界史）を担当する寺前が、史資料を用いた高校の歴史授業の可能性について、和歌山大学教育学部の三品に助言・指導を依頼したことに始まる。高校側（寺前）としては、歴史研究において高い専門性を有する大学との連携を行うことで、高校の教育現場での専門的な指導の改善ができること、また大学の研究者や学生に参観してもらうことによって新たな授業の手法を見つけることを期待した。これに三品も応諾し、直ちに研究計画の作成に着手した。当初の計画としては、寺前が和歌山北高校のクラスにおいて世界史もしくは日本史の授業を実施し、これを三品と和歌山大学教育学部世界史ゼミの学生が参観し、授業後に合同で協議会を行って次の授業につなげていくというものであった。大学側（三品）としては、こうした挑戦的な授業実践に携わることで自身の歴史研究を教育現場に生かす道を探ることができること、また高校の歴史教育の現場を学生に実見させることで、専門性に対する学生たちの意識を高めることを期待した。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大と緊急事態宣言の発令により、上記の計画は修正

を余儀なくされた。まず、高校の授業進度に大幅な狂いが生じた。そのため実験的・挑戦的な授業を実施することが困難になった。また教育学部全体の方針として学外授業が原則禁止されたことにより、学生の授業参観は実施困難な見通しとなった。それでも 2020 年 8 月には 2 学期（大学では後期）からの授業研究を見据えて本研究を申請し採択されたが、この時点で当初計画していた学生の本研究への参加は断念した。これにより、本研究は基本的に三品が寺前の授業（第 2 学年・世界史）を参観し、その後に二人で協議会を行って次の授業につなげるという形で実施することになった。

以下は、9 月以降に実施された研究打ち合わせと授業参観・協議会の記録である。研究授業は和歌山北高校 2 年 A 組の「世界史 B」にて行った。打ち合わせと協議会は、いずれも寺前と三品の二人で行った。

2020 年 9 月 4 日（金）13：30～ 研究打ち合わせ 【場所】和歌山大学三品研究室  
10 月 14 日（水）9：55～10：45 研究授業「『帝国』とはなんだろう？」  
10 月 19 日（月）9：55～10：45 研究授業「中華帝国の形成②」  
10：55～11：45 協議会  
11 月 2 日（月）9：55～10：45 研究授業「中華帝国と東アジア②」  
10：55～11：45 協議会  
12 月 18 日（金）13：30～ 研究打ち合わせ 【場所】和歌山北高校  
2021 年 1 月 25 日（月）10：05～10：55 研究授業「西ヨーロッパ中世世界の成立①」  
11：00～11：30 協議会

以上のように、実質的な研究期間であった 5 か月の間に、打ち合わせを 2 回、研究授業（授業参観）を 4 回、協議会を 3 回実施した。（文責：寺前）

### Ⅲ 成果と課題

#### ①高校側から見た成果と課題

10 月 14 日に実施した研究授業「『帝国』とはなんだろう？」では、中国の秦の政策の特徴を史料から読み取る活動を行った。使用した史料は、『史記』始皇帝本紀に記されている郡県制・度量衡・文字の統一に関する文書である（歴史学研究会編『世界史史料 3 東アジア・内陸アジア・東南アジア I 10 世紀まで』、岩波書店、2009 年、所収のものを使用した）。さらに 10 月 19 日に実施した研究授業「中華帝国の形成②」では、前回の授業を踏まえ、漢の政策の特徴を史料から読み取る活動を行った。この授業で使用した史料は、『漢書』卷一九上、百官公卿表上に記されている儒教の官学化に関する文章と、『礼記』曲礼上に記されている天子号・皇帝号に関する文章である。この二つの研究授業のねらいは、秦・漢それぞれの皇帝が、郡県制・度量衡・文字の統一や儒教・天子号・皇帝号の採用によって、多様な人々を一元的に支配することを目指した体制であるということ、史料を通して理解することにあった。

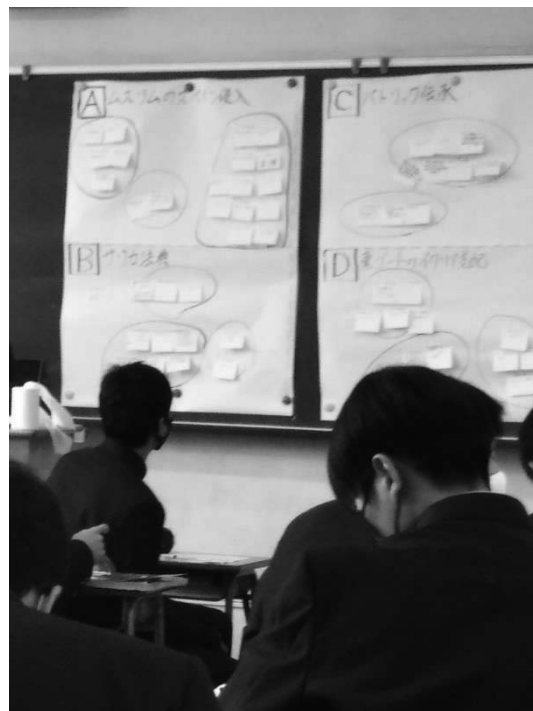
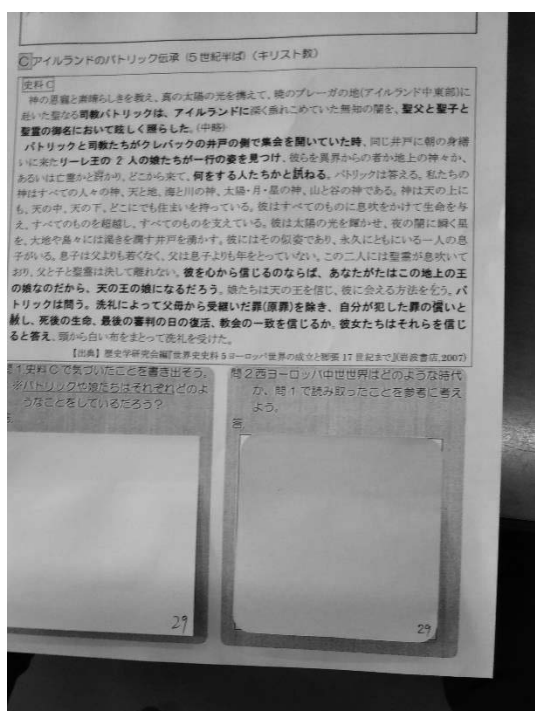
この二回の授業を踏まえて協議会を行った。ここで三品から、中国における通史的な理解を通した授業展開をすることが望ましいという意見が出された。この協議会において、中国

大陸における多様な人々を統治するために各王朝で取り組まれた政策、その中での秦・漢の位置づけを行いながら授業を行うべきであるということが確認された。

以上の協議会の内容を踏まえ、11月2日に研究授業「中華帝国と東アジア②」を実施した。『隋書』倭国伝に記されている隋からみた遣隋使に関する史料と、『日本書紀』に記されているヤマト政権側からみた遣隋使に関する史料を使用した。この授業では、隋の皇帝が周辺地域との関係作りとして使った「冊封体制」の理解を促すために遣隋使を取り上げ、ヤマト政権と隋・唐の関係の変化に生徒が気づくよう指導した。

この後、12月18日に研究打ち合わせを行い、今後「中世西ヨーロッパ」の単元で研究授業を実施することを確認した。また、この単元を扱う際には、西ヨーロッパ世界の通史的な理解を踏まえた上で授業を行うこと、そして生徒たちが活動的になる仕組みを作ることを課題として設定した。

この課題設定を踏まえ、2021年1月25日に研究授業「西ヨーロッパ中世世界の成立①」を実施した。この授業では、「ゲルマン人の大移動」に関する史料を四種類用意し、「気づいたこと」を黄色の付箋に、「西ヨーロッパ中世世界はどのような時代か」（解釈）を青色の付箋に生徒一人一人が書き込むようにし【写真1】、その付箋をポスターに貼り、クラス全体で共有するといった活動を行った【写真2】。



【写真1】付箋をつけたワークシートの例 【写真2】生徒が付箋を貼り出したポスター

この授業で使用した史料は、ティレハーン「パトリックに関する覚書」、「サリカ法典」、プロピウス「戦史」第五巻、ヒメーネス・デ・ラーダ「スペイン事績史」の四種類である（すべて歴史学研究会編『世界史史料5 ヨーロッパ世界の成立と膨張 17世紀まで』、岩波書店、2007年、所収）。この授業では、普段授業では積極的に発言することのない生徒も、自分の考えを付箋に書き込み活発に学習活動に参加していた。また「西ヨーロッパ中世世界は

どのような時代か」という問いに対しては、生徒から「キリスト教を信仰し始めた時代」「争いが多い時代」「同盟を組むことで支配できた時代」「罪の償い方はお金で解決する時代」などの回答が得られた。このような回答からは、生徒たちが授業での活動を通して西ヨーロッパ中世世界は争いが多く分裂の時代であったことを理解したことが窺える。こうした歴史認識は、これ以降の授業において、「領主たちが同盟を組む」ことで成立した「封建社会」をより深く理解させていくために重要な基礎となるものである。

以上が研究授業それぞれの概要であるが、研究期間全体を通して史料を用いた授業をすることができ、新たな授業の手法を見つけ出す糸口になった。本稿冒頭で述べたように、文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年3月告示）』では、「世界史探究」の目標として「世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに、諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする」ことが掲げられており、高等学校の授業においてはこれからますます史資料を読み取ること、そして根拠をもとに情報をまとめる技能を養成することが求められている。今回の授業実践では、初歩的ではあるが、このような活動に取り組むことができた。

一方で、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により当初の予定から大幅な変更が生じた。そのため年間を通じた体系的な授業展開を行うことが困難であった。今後の課題は、通史的な理解、さらに各地域を比較した理解を踏まえ、年間を通じた計画を立て、生徒が史資料を読み取る上で効果的なものを精選し、読み取った内容から考察する活動を取り入れた授業を実践していくことであると考えている。（文責：寺前）

## ②大学側から見た成果と課題

上述したとおり、本研究は、もともと和歌山大学教育学部の学生を参加させることで大学の教員養成機能の強化に役立てることも企図していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、そうした大学生への教育的側面については断念せざるを得なくなった。教職を目指す学生たちにとって、現職の高校教員の授業実践を実見し、協議会で授業内容と方法について検討し、それが以後の授業にどのように生かされていくのかを体験することができれば、非常に大きな学びとなったはずである。今回、そうした活動が行えなかったことは誠に残念であり、状況が改善することを願うばかりである。

歴史学を専門とする研究者の立場から言えば、今回、高校の世界史の授業をある程度継続的に参観し、その実践の一端を垣間見れたこと、また各授業回での史資料の使い方について具体的に助言ができたことは、自らの専門と教育現場との関係を考えるうえで貴重な経験となった。新型コロナウイルス感染拡大という困難な状況下でも本研究の実施を承諾し、このような貴重な機会を与えて下さった和歌山北高等学校、とりわけ雑賀敏浩校長に厚く御礼を申し上げたい。

今回の授業研究では、合計4回の研究授業に対して三品は三つの方法で関与した。第1回と第2回は、使用する史資料も授業の構成も寺前が独自に決定して授業を行い、三品はそれぞれの授業について事後に助言を行った。第3回は使用史料について三品が予め提示した上で寺前が授業を構成し、授業後に当該史資料の授業での扱い方が適切であったか否かを

検証した。第4回は、単元全体で獲得すべき歴史像について授業前の打ち合わせとメールでの質疑応答を通して確認し、そのうえで寺前が史資料と授業の構成を決定して授業を行った。指導案で譬えれば、三品の関与は「授業での史資料の扱い方」から「各授業回の目標に適切な史資料の選定」へ、そして「単元目標の捉え方」へと、いわば「より深い」レベルへと移行していったと言える。

このような三品の関与の変化は、寺前が三品に求める助言の内容の変化に即したものであった。当初は寺前が完成させた授業へのコメントを求められ、次に授業の主題に適切な史資料の紹介を求められ、最後には「時代に対する理解」をより深めるための助言を求められた。これはつまり、授業において史資料を適切かつ効果的に使うためには、その授業回を含む単元全体に対する理解が不可欠であり、授業者が歴史の大きな流れに対してどのような認識を持っているのかということが極めて重要であることを改めて示したものである。

このことを第4回の研究授業に即して言えば以下のようなになる。事前の打ち合わせとメールの交換の中では、西ヨーロッパの中世社会とはどのような特徴を持つ時代であり、中世の終焉とはどのような歴史的变化をメルクマールとするのか、といったことが議論された。その結果、西ヨーロッパの中世社会は所領（荘園）を有する領主によって分権化された社会であり、そうした領主間に結ばれた双務的契約とローマカトリック教会の浸透によって社会秩序に一定の安定が確保されていた時代であることが確認されたのである。こうした理解に基づいて、第4回の研究授業では「ムスリムの侵入と抵抗」「領主裁判権の事例」「ローマ教皇権威の浸透」「領主間の同盟契約」を示す史料群が提示された。この四種類の史料の提示方法についてはなお改善の余地が大きく残っているように感じられたが、生徒が西ヨーロッパ中世社会の息遣いに触れつつ当該社会の構造を考え理解するうえで、極めて適切な史料群が取り上げられたということは間違いない。

このような側面で歴史研究の専門家の関与が意味を持ったのは、寺前がまだ教歴の浅い「駆け出し」の教員であることが大きい。しかし、上述のように高等学校の歴史教育において史資料の読み取りと考察が大きなウエイトを占める時代の到来は、地歴科に携わる教員すべてに、歴史の大きな流れをどう捉えるのか、それとの関連でどのような史資料を選択すべきなのかといったことに対するより深い知見を求めるだろう。そうだとすれば、ここに、歴史研究者としてより高度な専門性を持った大学の教員が貢献できる領域がある。今回の授業研究は実質的に半年間しかなかったため、方法を初歩的に模索したところで終わったが、それでも重要な一步を踏み出すことができたと考えている。今後はこの到達点を踏まえ、高大連携の枠組みの下で、史資料を用いた授業の開発に寄与していきたい。（文責：三品）